

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その37)】

見慣れぬユムシ

台風 10 号が接近中の 2004 年 7 月 30 日、京大瀬戸臨海実験所の北浜でシュノーケリング観察をしていたところ、干潮時に水深 1 m ほどの海底の石の下から ころりと出てきたのは、ずんぐりとした体つきのユムシだった。北浜ではめったに見かけない動物である。先に短い紐（ひも）のような吻（ふん）がついている。体は多少収縮し、吻を除いた体長が 7 cm ほどだった。この吻から粘液を出して、海底の有機物をからめとって食べているおとなしい動物である。そのため、海底に綺麗な幾何学模様を描くこともある『芸術家』だ。

脱走名人のユムシ

その見慣れぬユムシをファスナー付きネットに入れ、水槽に入れておいた。翌日に見ると、入れたはずのユムシが見つからない？ 水槽の中をあちこちひっくり返して、やっと探し出すことができた。硬い骨格を持たず体が柔らかいため、糸のように体を細くして抜け出たのだろうか？ このユムシはなぜか吻がとれた状態となってしまう（図）。取れた吻は、再生して作り直せる能力があるが、その間は餌取りには困るだろう。

この個体をホルマリンで固定して、後で解剖して中がどうなっているか調べてみた。内部はほとんどがぐるぐる巻いた消化管ばかりであった。腹側には、太い神経が 1 本の白っぽい筋として伸びていたものの、脳のような膨らみはどこにもなかった。

なお、この個体の戸籍は不明なままになっている。

変わったユムシたち

ユムシ類には変わった仲間がいくつも居る。その一つは、日本産のサナダユムシだ。本体の体長が 40 cm ほどになるユムシ類中最大の種類で、吻の長さは 150 cm にも達する。かつて、底引き採集で吻の一部だけが捕獲され、その正体が長らくつかめず、謎の動物だった経歴の持ち主である。現在でもサナダユムシは 1 目 1 科 1 属 1 種で、日本固有のユニークなユムシである。日本中にかつていたのに、昨今の開発などで減少し、瀬戸内海の非常に限定された場所にしか生息しなくなった。

2 例目はボネリムシで、これまたわが国にも生息する。この種の雄は異常に小さい。いわばチョウチンアンコウの雄のように、雌への寄生者だ。雄は単なる精巢になり下がっている。なぜ雄はこんなに小さいのだろう？ 雌の体へのくっつき具合によっては間性となり、れっきとした雄でなくなることもあるという。沖縄方面でのシュノーケリング中に見かけたことがあるが、そのときには、吻だけ本体よりも長々と伸ばしているのがしばしば観察できた。

ユムシ類は独立した動物門として取り扱われてきた。しかし、最近の分子系統学的手法によると、ユムシ類はゴカイやミミズなどの仲間の環形動物に近縁の一群とされるようになってきているようである。



図. 2004年7月30日に瀬戸臨海実験所北浜で転石の下に潜んでいたユムシの一種